

深田久彌●山の文学全集

瀟洒なる自然

80
ア

監修

小林秀雄

井上靖

三田幸夫

今西錦司

朝日新聞社

深田久彌●山の文学全集 IV

瀟洒なる自然



深田久彌・山の文学全集 IV

瀟洒なる自然

全十二巻・第四回配本

一八〇〇円

発行 昭和四十九年六月二十一日

著者 深田 久彌

著作権者 深田志げ子

装幀 原 弘

発行者 岡見 璋

印刷所 明善印刷株式会社

発行人 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋
© Shigeko Fukada 1974

深田久彌・山の文学全集
Ⅳ

目次

山岳遍歴……………九

幌尻岳	二
トムラウシ	六
太郎山	三
大峰山	七
高妻・乙妻	三
伊吹山	七
那須岳	四
祖母・傾	四
阿蘇山	五
塩見岳	五

瀟洒なる自然…………… 七

春…………… 九

山頂(六) 春雨の山(七) 行者ニンニク(七) 山と日本武尊(七)
ビッケル(七) 国見峠(七) 安楽椅子の登山家(八) 越前の山
(八) 山の小鳥たち(九) 北上山地と陸中海岸(九)

夏…………… 一〇

ウェストン祭(一〇) 下北半島の山(一〇) ワンダーリング(一〇)
谷二つ(一一) 御来光と御来迎(一一) 戦場ヶ原(一二) 文句三つ
(一二) 奥大日岳(一三) すばらしい雲(一三) テントかついで(一三)
出羽三山(一三)

秋…………… 一四

瀟洒なる自然(一四) 信濃川(一四) 登山小感(一五) 伊勢街道の高

見山(一六) 秋の山の湯(一五) 餓鬼・唐沢(一四) 非合理なもの(一五)
有明山(一六) 登山はスポーツか(一五) 晩秋の田沢湖線(一五)

冬 一七四

冬山の季節(一五) 年末年始の山(一五) 雪白き山(一六) 白馬山
麓(一六) 十二支の山(一六) 人のいない山(一六) 遭難(一六) 高
峰と草津(一六) 山おんな(一六) 焼額山(一七) スキー今昔(一七)
雪解川(一七) 山に失った友(一七) あとがき(一八)

山頂の憩い 三二

『日本百名山』その後

京丸山 三五

黒姫山 三九

日野山と木ノ芽峠 三二

知床半島 三〇

鳳来寺山	三六
弥彦山	三二
秋の北アルプス	二四
奥鬼怒	三五
二上山	二六
朝日岳から小川温泉へ	二六
ニベソツ山	二五
剣山	二七
御池山と地藏峠	二七
二子山	二七
暑寒別岳	二九
駒ヶ岳	二八
甲武信岳今昔	二八
笈岳	二七
音更山と石狩岳	二九
大千軒岳	二五
あとかぎ	二九

I

山と御対面(三〇三) 山に見える町(三〇五) 八甲田高原(三〇七) 手取
溪谷(三〇九) 冬山の魅力(三一三) 新緑の散歩道奥只見(三一四) 大台
ヶ原と松浦武四郎(三一六) 山六題(三一八) 北海道の山と湖(三二一)
春のスキー(三二五) 日光と那須の山々(三二七) 五月の山(三三〇)

II

山の愉しみ(三四二) 健康な豚(三四四) 南アルプスの印象(三四七) 捻
挫(三四九) 御在所山の岩壁(三五三) 未丈ヶ岳(三五五) 北アルプスの
池沼(三五七) 春の山(三六〇) 雪の山(三六四)

III

私たちの登山(三六八)

山の風物詩……………三七

山の風物詩(二六) 高山植物あれこれ(二五) 高山の花、エーデル
ルワイス(二五) 匂いのある山の植物(二五) 秋の山の花(二五)
冬の風物詩(二六)

回想の山旅……………四二

歩く喜び(四三) 一高時代の山の思い出(四二) 白馬岳の思い出
(四七) 朝日連峰の思い出(四九) 蔵王回想(四三) 思い出の屋久
島(四二)

深田久彌・人と作品(四)
解題

近藤 信行……………四三
中馬 敏隆……………四四

山岳遍歷

幌 尻 岳

山好きの間には「道具オンチ」と呼ばれる人種があつて、登山用具にひどく凝るようであるが、私には無縁で、私は何でもあり合わせのもので間にあわせている。ところが今度はその種族に私も近づいたようである。

まずルック・ザック。フランスの latuma 製を買った。フランスの山の雑誌の広告に、ガストン・レビュファの担いでいる写真が出ていた、その品である。私の家にはサブから特大まで十くらいのザックがいつの間にかたまつたが、私に充分な満足を与えるものは一つもなかった。latuma を得て初めて私は快適な担ぎ心地を感じた。いろんな点で便利に出来ている。大きさも私の体力に手頃である。

それから私が「銀紙」と呼ぶところの防寒着。これはハツミ・カッチャンの試作品で、薄い繊維に遮熱材料の

錫箔が塗つてある。丸めると両手で包めるくらい小さくなるし、フワフワと軽いことは情のこもったラブ・レターほどの目方もない。届けてくれた試作者の吹聴によると、これを着て寝袋に収まると、真冬のテントの中でも汗を掻くというのだが、はて、どんなものだろう。

雨具はナイロンのボンチを調えた。ちよつと気恥ずかしいほど派手なブルーである。しかしその布の真ん中の穴から首だけ出して歩くことを想像すると、今度の山旅では少し雨が降ってくれた方がいいと願いたくなった。それからポリタンクと商標のついた、一リットル入りのポリエチレンの水筒。旧式登山者の私にとっては、こんな容器も珍しいのである。

おまけにカメラ。写真の玄人に勧められて、売り出して間もないオリンパスのペンEEを買った。これはファインダーを覗いてシャッターさえ押せば、バカでもチョンでも撮れるというのだから、私のような物臭にはもってこいである。それにはカラーフィルムを入れた。

最後に、お尻に大きなツギのあたった今までの古ズボンを捨てて、薄ネズミ色の軽いアムンゼンを新調したこ

とを付け加えよう。これでもう少し私の歩く恰好さえよ
かったら、あつぱれ新時代の岳人に見なされたかもしれない。

novice のようにこれらの新装備によそわれた私に、
そのうえ豪奢の絶頂と思われたのは、札幌まで飛行機で
飛んだことである。これまでの山行で私は一等車にさえ
乗ったことがない。なるべくは急行賃さえ節約しようと
するケチンボの私が、そんなブルジョワらしい真似をし
たのは、愚妻のはからいによる。夏の北海道行の汽車が
どれも超満員であることを知った彼女は、私の確とした
承認も得ないうちに、往復の飛行機の切符を買ってきて
しまったのである。たまに不時の収入があると、それを
貯蓄しようという美徳に欠けている点で、彼女は私に似
ていた。

日高の山旅は私の年来の希望であった。札幌在任の私
の山友だち茂知君に去年からそれを約束していた。それ
からこの春北大山岳部の人がヒマラヤ行きのことで私の
家へ見えた時も、よろしく頼んでおいた。何しろ日高の
山は奥深く、あんまり開けていない。ひょいと出かけて

登ってくるというわけにはいかない。

八月四日午前十一時、千歳の飛行場から札幌へ着くと、
もう茂知君と、私の誘った山川勇一郎君が待ちかまえて
いた。自動車の大好きなこの画伯は、東京からの長途を
自ら運転して、一日先に到着していたのである。茂知君
は某信託銀行の支店長だが、銀行より山へ精動している
という噂が立っている。北海道へ山登りに行く友人はた
いてい彼の許へ立ち寄る。銀行の入口へ汚い風体の男が
現れると、行員は一目で「また、来た、来た」と囁き
あって、直ちに支店長室へ通告するそうである。

その午後、銀行の応接室で日高行のメンバーが顔をあ
わせた。私たち三人のほかに、北大山岳部の先輩で同大
学地質学の助教授橋本誠二君、というよりヤンチャと呼
んだ方が通りがいいらしい。第三次マナスル先遣隊の隊
員であり、日高の山には呆れるくらい詳しいことが、今
度の旅で私に分かった。それから茂知君の山友だち高沢
光雄君。それに北大山岳部の現役三名、鈴木良博、鶴巻
大陸、大山佳邦の諸君。大陸だの佳邦だのという立派な
名前は、大東亜戦中に生まれたからだろう。この二人だ
けが私と初対面である。行程のプランはすでに出来上が

っており、食糧その他必要物資も買い整えられていた。遠来の山川君と私は拱手傍觀（きょうしやうぼうくわん）。ただ地元諸君の仰せに従ってさえおればよかった。二人はその夜は支店長宅に泊めてもらった。

翌朝、一行八人札幌駅に集合して、八時五十三分発の苦小牧行に乗った。空はきれいに晴れて、途中の千歳あたりから、恵庭、紋別、風不死（ふうふし）、樽前の連山がよく見えた。苦小牧で日高本線に乗りかえ、静内（しやうない）で下車したのは午後一時。ここが今度の山旅の出発点だった。

近年とみに繁華になったという静内の町を、私たちはゾロゾロ歩きながら、これからの徒渉用の地下足袋や、指先の分かれた靴下や、スパッツ風の短い脚絆など、こういう地方の町でしか売っていない物を買ひあさっていると、中学生、高校生、自衛隊と三組の鼓笛隊が賑々しく通って行った。明日町の近くでイヨモンテ（熊祭り）が行われるので、その前日祭だそうである。

これから私たちを山奥まで運んでくれる北海道電力のトラックが、町角で待っていた。これは前もって茂知君が支店長の顔で手配してしてくれたのである。トラックは町を離れて新冠川（たけがわが）のほとりに出ると、それから一途川

に沿って上流のダム・サイトまで走った。上へ進むにつれて谷が迫り「函」をなしている箇所もある。数年前までは北大の猛者連が苦勞して二日も三日もかかって溯行したそうだが、日高の山も年々開けつつある。

静内からはるばる七六キロ、発電事業所に着いたのは夕方近かった。手厚く迎えられたその宿舎で、私たちはまずカン詰めのビールで山旅の第一夜を祝った。

翌朝六時すぎ、宿を出る時から、地下足袋にワラジという足ごしらえであった。約一キロ先の工事場までジープに乗せてもらったが、そこで道は終わって、歩き出しから川をジャブジャブ渡った。日高の山では川筋がすなわち道だと聞いていたが、それは徒渉というより、川の中を歩いて行くといった方が適切だろう。河原が歩けなくなるまで水の中である。初めはなるべく濡らすまいと用心していたが、ヒザが濡れ、モモが濡れ、ついにひんやりと一物が犯されるに及んで、もう観念した。

両側の山は原始の匂いのするウツソウたる森林で、以前は暗い谷だったそうだが、先年の台風で木が倒れて、見違えるほど明るくなったとのこと。景色のいい所へ来ると、山川画伯は、写生を始める。すると準画伯の高沢

君もスケッチ・ブックを拡げる。現役はここぞと思う水の中へ釣糸を垂れるが、獲物はなかった。

本流と北股との分岐点にちょっとした空地があつて、ケルンが積んである。その横でお茶をわかつて一休みしている頃から、小雨模様になった。それから先は、もう河原の余裕などなくなつて、岩と滝の連続である。滝の横の大岩を乗り越えたり、川っぶちの岩のへりを伝つたり、それもかなわなくなると、ジャブジャブ水の中。川歩きは北大のお家芸で、通れない淵へ出るとルックをかついだまま泳いで渡るのだそうである。そんな目にあわされなかつたのは私の幸運であつた。

底ひそしのように突き出た岩の蔭で昼食を食つた時、もう雨は確定的になつていた。それから先も長かつた。新調のボンチョを着たものの、滝を攀じ登る時に浴びる飛沫は防ぎ切れない。ビシヨ濡れになつた。やや谷が開けてきた所で二股になつた。左へ入る。足許の崩れ易い、水を含んだ砂礫の急坂がしばらく続いた。それから涸沢のガラガラした岩を踏んで登つて行くと、ようやく道が平らになつた。圈谷底をなす原の一端に出たらしい。

この原は七ツ沼と呼ばれている。大小七つの沼の散在している桃源境であるが、夕方の暗さと雨霧のため見晴らしが利かない。たつぷり水気を含んだブッシュをわけて行くうちに、あます所なく濡れた。やがて砂地へ出て私たちの前に一つの沼が現れた。すこしおくれて来た茂知君が、「熊！」と脅かされて、あわててその沼の中へ避難した。実はちょうど来合わせた二人の登山者の連れていた大きな犬が、霧にぼやけて熊らしくみえたのである。シュンとなつた茂知君には沼の深さなど問題でなかつた。一説では泳いで渡つたことになつてゐる。

沼の反対側が今夜の泊まり場であつた。濡れた寒さで震えているうちに、まずサーブ用のテントが張られた。サーブとはわれわれ年長者四名のことで、現役の若い三人はシエルバ、中間年齢の高沢君はさしずめリエゾン・オフイサーといふことになつた。サーブがテントの中で着替えをしているうち、シエルバたちは大きな焚火をおこし、夕食の支度にかかつていた。全く有能な北海道シエルバで、この山旅中、天幕の設営から炊サンまで一切の世話を彼等が受け持ってくれた。